

エイズ・結核・マラリアのない
未来に向けて日本の力を



FGFJレポート

グローバルファンド日本委員会
Friends of the Global Fund, Japan
Joining the Fight Against AIDS, Tuberculosis and Malaria

Winter 2019
<http://fgfj.jcie.or.jp>

No.
21



The Global Fund / David O'Dwyer

「健康でより良い世界」への投資

—第6次増資を振り返る—

グローバルファンドが2020年から3年間に必要とする資金の調達を目指す第6次増資会合が10月9、10日、フランスのリヨンで開かれ、各国や民間ドナーから総額140億2000万ドルの資金拠出が誓約されました。保健分野の国際機関としては前例のない金額です。会合では主催国フランスのエマニュエル・マクロン大統領が「不平等と闘い、社会正義を実現して次の世代に健康でより良い世界を届けよう」と訴え、目標額(140億ドル)を超える成果が実現しました。

(報告:日本国際交流センター執理事務・グローバルファンド日本委員会事務局長 伊藤聡子)

増資会合に至るプロセス

グローバルファンドは、3年に一度、三大感染症対策に必要な資金額を算定し国際社会に呼びかけて資金を調達しており、これを増資と呼んでいます。ドナー国政府の持ち回りで増資会合が開かれることがグローバルファンドの特徴です。

2019年1月にグローバルファンド事務局が発表した投資計画では、低・中所得国の三大感染症対策に必要な資金は3年間で1010億ドル(約10兆9千億円)であり、そのうち①グローバルファンドが最低でも140億ドルを低中所得国での対策に投資し、②それらの国の国内資金が458億ドルまで増え、③他の国際援助資金がこれまでと同レベルに維持されれば、1600万人の命を救い、2023年までに三大感染症による死亡率が2017年と比べ52%減少する等の成果目標が設定されました。

この目標は、WHO、UNAIDSなどの国際機関や大学・研究所の専門家との共同作業で設定されたものです。2030年までに3つの感染症流行を終息させるというSDGsの目標を達成するために、次の3年で確実に減少カーブを

軌道に乗せたいという感染症対策コミュニティの決意を表したものでした。しかし現実をみれば、主要ドナーであるG7諸国は様々な国内問題を抱え内向きになりがちであり、また、過去の対策が功を奏したことが皮肉にも三大感染症への関心を下げ、他にも保健課題が山積している中で、前回増資(123億ドル)より15%増という野心的な目標の達成は最後まで予断を許さない状況でした。

900名が見守った劇的な展開

リヨンで開かれた増資会合には、国家元首を含む政府関係者、議員、企業、市民社会、感染症の当事者、4名のノーベル賞受賞者を含む科学者などおよそ900人が参加しました。10月10日の最終セッションで集計結果が発表された時点では誓約額の合計が138億ドル。このため、マクロン大統領がフランスの拠出に6000万ドルを追加し、ゲイツ財団のビル・ゲイツ共同議長もマッチングで同額を追加することを発表しました。それでもまだ、目標額には8000万ドル不足していたことから、さらに、マクロン大統領とゲイツ氏、U2のボノ氏が増資期間中に1億ドルを集めると約束し、会場は大きな拍手と歓声で包まれました(冒頭写真)。

多様化するドナー、アフリカからも誓約

G7諸国を始めとする主要ドナーがいずれも前回より増額で拠出を約束したことが、増資の成功を導きました。日本からは鈴木馨祐外務副大臣が登壇し、6月のG20大阪サミット直前に発表していた8億4000万ドルの支援を改めて表明しました。財政難の日本が、真摯に検討を続けたこと、G7諸国の中でいち早く増加を決断したことは、その後の増資交渉に弾みをつけたとして高く評価されています。

その一方、ドナーの多様化も新しい現象でした。官民あわせて合計74のドナーから誓約があり、全体額の92.6%は政府(58か国)からの拠出ですが、7.4%にあたる約10億ドルは民間ドナー(16組織)であり、民間からの拠出は増資の回を重ねるごとに増えています。また、資金援助を受けている低・中所得国からの拠出誓約も大幅に増えました。アフリカからは、ナイジェリア、南アフリカをはじめ23カ国が合計7600万ドルの拠出を誓約しました。支援を受ける一方で、貢献もする。どこか矛盾した行為にも見えますが、グローバルファンドという国際公共財に、低・中所得国も主体的に関わりその結果に責任を持つという意味で重要な意味合いを持ちます。

主なドナーと第6次増資拠出誓約額(1億ドル以上のみ掲載)

1 米国	46億8000万ドル	9 スウェーデン	2億9016万ドル
2 英国	17億1600万ドル	10 ノルウェー	2億2381万ドル
3 フランス	14億2944万ドル	11 イタリア	1億7758万ドル
4 ドイツ	11億0296万ドル	12 オランダ	1億7206万ドル
5 日本	8億4000万ドル	13 オーストラリア	1億6377万ドル
6 ビル&メリンダ・ゲイツ財団*	7億6000万ドル	14 プロダクト(RED)*	1億5000万ドル
7 カナダ	6億9944万ドル	15 スペイン	1億1030万ドル
8 欧州委員会	6億0663万ドル		

*は民間部門のドナー

当事者の存在感

グローバルファンドのピーター・サンズ事務局長は11月の理事会で、増資に多くのドナーの賛同を得られた要因として、集めた資金を成果に結びつけてきたこれまでの実績や、主催国フランスとマクロン大統領のリーダーシップなどをあげたほか、世界中のパートナー(注)が増資を働きかけた大きなうねりを挙げました。その“パートナー”の中でも特筆したのが、感染当事者のアドボケーツでした。

官民連携で知られるグローバルファンドの中でも当事者

注) パートナーとして挙げられたのは、感染症の当事者コミュニティ、日米欧のグローバルファンド委員会、GFANに代表される市民社会のネットワーク、資金を受ける中・低所得国の元首、各国の議員、技術パートナーである国際機関、親善大使の役割を果たしたアーティスト等の著名人、グローバルファンドの現在・過去の理事たち。



HIVとともに生きる人々を代表して登壇したコニー・ムデンダ氏。スピーチのあと娘を抱きしめる。
The Global Fund / David O'Dwyer

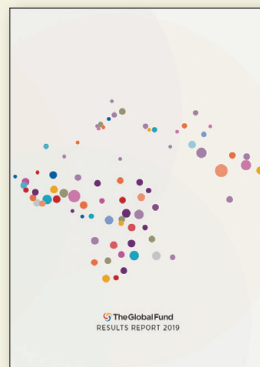
コミュニティの存在は、大きな特長の一つです。感染症とともに生きる人々が理事会で政府代表等と並んで1議席を持ち、意思決定に関わる国際機関は非常に稀です。増資に至る交渉でも、グローバルファンドの支援の結果として今があると自身のストーリーを語り、投資を呼びかけました。資金の調達にも、使途の決定にも関わり、意見を述べ、結果を出す責任も持つ。自分たちの病気のことを他人任せにしない、という当事者たちの強い意識の表れです。日本でも当事者による起業や当事者団体の設立、政策形成への関与も増えてきました。当事者の参画を所与のものとしているグローバルファンドのシステムは、日本の医療、障害分野でも参考になることが多いでしょう。

健在な多国間の枠組み

自国中心主義やポピュリズムが世界中で勢いを増している中で、三大感染症対策に140億ドルもの資金が集まったことは、マルチラテラリズム(多国間主義)がまだ健在であることを意味しており、グローバルファンドはその象徴です。これは、G8九州・沖縄サミットでグローバルファンド誕生のきっかけを作り、「人間の安全保障」を外交政策の基本方針として掲げる日本として誇るべきことでしょう。

しかし、自戒を込めてこの1年を振り返ると、グローバルファンドに賛同する声は一部の専門家にとどまり、他のドナー国のように政治や政府を動かすほどの国民的な世論の盛り上がりには欠けたのが実態でした。来年2020年は九州・沖縄サミットから20年の節目の年。エイズの流行が一国を滅ぼすかもしれないという危機感で世界が覆われていた当時から今日まで、グローバルファンドという多国間の枠組みが何を変えてきたか、感染症に加えどのような役割を果たしていくべきか、国際保健分野における日本の多国間主義はどうあるべきか、ODA以外に生かせる民間のリソースはないか、活発な議論を起こしていきたいと考えています。

グローバルファンドのパートナーシップ 17年間で3200万人の命を救う —2019年成果報告書



グローバルファンドの2019年成果報告書 (Results Report 2019) が9月に発表されました。各国政府、国際機関、二国間援助機関、市民社会グループ、感染症と闘う人々、民間企業など、幅広いグローバルファンドのパートナーによる努力の結果、2002年から2018年末までの17年間に3,200万人の命が救われたと報告しています。

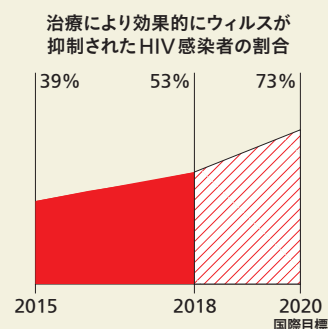
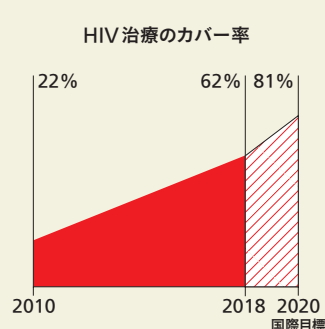
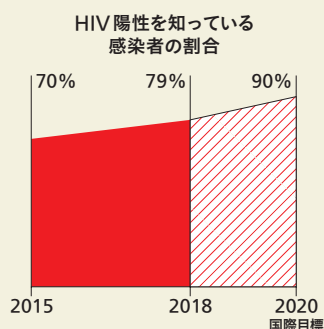
疾患別にみる成果

2018年の1年間、グローバルファンドが資金を供与した主な国々で以下の成果が達成されました。

エイズ



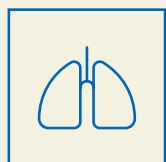
1,890万人
がHIV治療を受けています



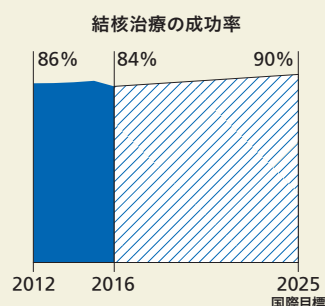
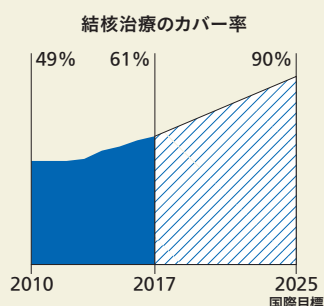
- 母子感染予防のための抗レトロウイルス治療を受けたHIV陽性妊婦の数: 71万9,000人
- HIV検査を実施した件数: 1億2,500万件

2019年6月時点で、グローバルファンドはエイズの予防と治療プログラムに200億米ドル、結核・エイズプログラムに21億米ドルを投資しており、低・中所得国に対する国際的なエイズ対策支援の20%を占めています。エイズによる死亡者数は2002年から2018年で56%減少、HIV新規感染件数は41%の減少がみられました。

結核



530万人
が結核治療を受けました



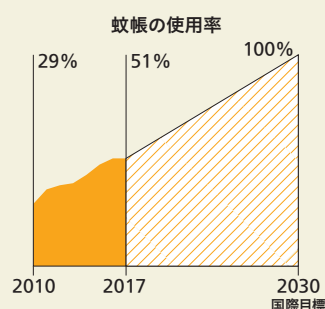
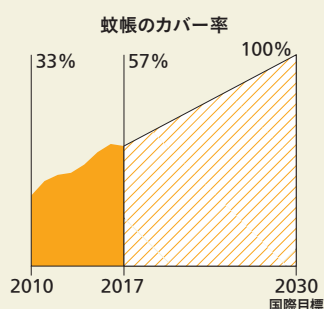
- 多剤耐性結核治療を受けている人数: 11万4,000人
- 抗レトロウイルス治療を受けているHIV陽性の結核患者で結核治療を受けた人数: 33万2,000人

結核は死亡者数が最も多い感染症であり、2017年には約160万人が結核により亡くなっています。2019年6月時点で、グローバルファンドの結核プログラム資金は66億米ドルで、低・中所得国に対する国際的な結核対策支援の69%を占めています。グローバルファンドが支援する国々での結核による死亡者数は2002年から2017年末までの16年間で22%減少しました。

マラリア



1億3,100万張
の蚊帳が配布されました



- マラリアの治療件数: 1億100万件

グローバルファンドは2019年6月時点で、マラリアプログラムに120億米ドル以上投資しており、低・中所得国に対する国際的なマラリア対策支援の65%を占めています。グローバルファンドが支援する国々でのマラリアによる死亡者数は、2002年から2018年で46%減少しました。



日本人とグローバルファンド vol.7

国際保健の現場と上流を往還しながら

永井真理さん

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 国際連携専門職・医師、グローバルファンド技術評価委員

転 勤族に育ったせいか放浪癖がある、という。杜の都で医学部を終え、東京の国際医療センターへ。さっそく漂泊の虫がうずく。「おもしろい旅行先に行くための方法を考えて、国境なき医師団だ、と。すみません」。肩をすくめた。派遣国では、「診断や処方も大事ですが、患者さんのそばでいろいろな話で気持ちを楽にしてあげたい、看護師さんのような仕事が好きなんです」。そんな自分の天性も自覚した。

だが、医療状況は過酷だった。スリランカでは、「一人一人を診て満足していたが、これだときりがいい。もっと広くこの人たちの助ける方法はないか」。2度目派遣のイランでは、治療を待つさまざまな人びとをまえに、限りある予算の使い方に悩んだ。解決策を公衆衛生学に求め米国留学へ。だが、「解決策は見えません。というか、みんなそこに悩んでいるんだとわかりました」。白黒の正解のないなか、ベストを尽くす覚悟が決まった。

帰国後、古巣の医療センターへ戻り、国際医療協力局で途上国の保健システム強化に携わる。カンボジア、セネガル、フィリピン……各国を回りながら、県レベル、保健省、そしてWHOとかかわる対象も大きくなった。とはいえ、意図して登りつめようとしたわけではない。来た仕事を誠実に勤めていたら、こういう道をたどった。

その間合いを縫うように、2010年から5年間、グローバルファンドにかかわる。各国から押し寄せる申請書を読み、採否

を決める審査委員。本コラム1回目の井戸田一朗医師と同時期だ。「本当に激務で井戸田先生と慰めあって励みましたが、自分がこんな寝ずに仕事できるとは知りませんでした」。三大感染症の専門家を相手に、保健システム専門家として、大きな資金が現場に投入されることの効果と負の影響についても激論した。そんな仲間たちと、いまもフェイスブックでつながる。

2018年からは技術評価委員として、プロジェクトの進展を阻害する要因がグローバルファンドに由来するものではないかという視点で分析や提言にあたっている。「みずから外部検討委員会を置くのは、組織論としてもすばらしい」。若い人の登用も多く、精力的な職員が多いことに感心しつつ、「メールが、熱心のあまりいつも長いのが玉に瑕(笑)」とも付け加えた。

現場とものごとが決まる「上流」とを往復しながら、「日本人」を意識することはあるだろうか。「正直あまり考えたことはないのですが」と言って、長い沈黙が続いた。「英語ネイティブでもなく、ハンディも多い。理事国であり、さまざまな場にも日本人が多く参加していますが、それが言い出し国の名誉枠扱いなら不本意。私も審査委員のときはひとりの専門家として務め、みんなもNAGAIの言うこととして耳を傾けてくれた。つねに“水準”には達していきたい」。さわやかに吹いていた風が、そのときだけ静かに止まった。

(インタビュー全文はホームページに掲載しています)

FGFJトピックス



Friends of the Global Fund Japan

@FGFJ_JCIE

グローバルファンド日本委員会 (FGFJ) は、世界エイズ・結核・マラリア対策基金 (グローバルファンド) を支援する日本の民間イニシアティブです
A @JCIE.org initiative that mobilizes Japan's support in the fight against AIDS・TB・malaria

Twitterデビューしました

グローバルファンドの第6次増資会合を機に、遅ればせながらFGFJも10月にTwitterデビューしました!

最新イベント情報やウェブサイト更新情報、グローバルファンド関連情報などを日本語と英語でお知らせします。またイベントの際にはリアルタイムで現地レポートをツイートしていきます! 世界中の幅広い世代にFGFJ、グローバルファンドについて知り、三大感染症対策にご関心を持っていただけるような投稿を発信していきますので、ウェブサイトやFacebookに加え、Twitterのフォローもよろしくお願いします。



FGFJとJCIE

グローバルファンド日本委員会 (FGFJ) は、世界エイズ・結核・マラリア対策基金 (グローバルファンド) を支援する日本の民間イニシアティブです。グローバルファンドに対する理解の促進と、感染症分野における日本の国際貢献の強化のために各種会合や調査、情報発信を行なっています。

民間外交のパイオニアである(公財)日本国際交流センター (JCIE) のプログラムとして運営されています。



FGFJレポート

2019年12月20日 No.21

編集・発行: 公益財団法人 日本国際交流センター (JCIE)

編集発行人: 伊藤聡子 (グローバルファンド日本委員会事務局長)

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目1番12号 明産溜池ビル7F

Tel: 03-6277-7811 (代表)

Mail: fgfj@jcie.or.jp http://fgfj.jcie.or.jp

編集協力: 宮田一雄、永易至文、加納啓善

Copyright ©日本国際交流センター 無断転載禁止